

書 評

村上哲見著

『宋詞研究 南宋篇』

内 山 精 也

早稲田大學

ひとり宋詞の研究者のみならず、宋代詩文を専攻する者にとつても、さらには樂府や唐詩元曲を専攻する者にとつても、待望久しい『宋詞研究 南宋篇』がとうとう刊行された。この姉妹編『宋詞研究 唐五代北宋篇』が刊行されたのは一九七六年三月のこと、副題として「唐五代北宋篇」という六文字が加えられたその時から、本書の刊行はすでに約束されていた。それから、ちょうど三十年という時を隔て、我々の大なる期待に少しも違ふことのない『南宋篇』が満を持して公刊されたことを、まず衷心より言祝

書 評

ぎたい。本書は、本邦初の體系的な南宋詞の研究專著であり、村上氏によつて打ち立てられた、日本詞學史上、二つ目の金字塔である。『唐五代北宋篇』がそうであつたように、本書によつて具體的に示された學問水準と内容が後學の目標となり、また規範となつて、今後の南宋詞研究は進められてゆくに相違ない。

私は、前著『唐五代北宋篇』に就いて詞學の何たるかを學び、今日に至るまで無數の學恩を頂戴しつづけている後學の一人である。そういう私が、本書をはじめて手にした時、早く讀破したいというはやる氣持ちとそれを戒めようとする肅然たる思いが交錯して、しばしページを開けなかつた。前者の思いは、より多くの讀者の氣持ちを代表するであろう。後者のそれは、つねづね氏の業績に導かれ、同じ時代を専攻してきた者にのみ共通する、特殊な感情かもしれない。そしてそれは、「三十年」という時の重みに由來する思いでもある。

『唐五代北宋篇』公刊後の三十年間に、村上氏が、科學と唐宋文學の相關關係や中國文人論、陸游研究や日本漢詩

研究等々の、多岐にわたる多様な研究成果を陸續と發表されてきたことを、我々は知っている。また、そのいずれもが、精確な考證と卓越した見識に裏打ちされた高水準の業績の数々であることも、よく承知している。しかしそれでもなお、これらの成果が、二大冊の『宋詞研究』の間に横たわる「三十年」の時をすべて語り盡くしているとは、私にはとうてい思えなかった。そういう非詞學の著作を、かりに白晝の太陽に喩えるならば、『南宋篇』に收められた詞學の專論は、三更半夜の月亮に喩えられるかもしれない。それを存分に味わうことのできる人は自ずと限られてくるが、とはいえ、それを理由に夜半の月より白晝の太陽の方が大切だという道理にはなるまい。それと同じく、一體どちらが氏の眞面目なのかは、そもそも餘人には量り難い。けれども私は、——「陰晴圓缺」を常とする月に似て、それが時に明るく時に暗くなることはあつたにせよ——この三十年の間、氏が『南宋篇』の構想を忘れたことは片時もなかったはずだ、と勝手に決め込んでいる。三十年、それはとりもなおさず村上氏が南宋詞を凝視し續けた時の總和

であり、日本の近代詞學のパイオニアをもつてしても、南宋詞は、それだけの時間を要する、容易ならざる對象なのだ、と私は直感した。それゆえ、『南宋篇』を前にして、危座して襟を正さざるを得なかったのである。

*

*

*

書評を始める前に、幾らか迂遠な形になるが、村上詞學の位相について、ここで記しておきたい。それが、本書『南宋篇』の特徴を語るのに、もっとも近道のように思われるからである。

詞學は、宋元以來千年に垂んとする長い歴史と傳統をもつが、とりわけ二十世紀前半の中國において、もっとも劇的な發展を遂げた。西歐起源の進歩主義的文學史觀と表音主義的國語觀が日本經由で輸入されるに及んで、韻文史における「唐詩宋詞元曲」説、國語における白話という路線が主流になり、その結果、宋代文學では詩と文は淘汰され、詞だけが教育界ひいては讀書界において重視される時代が到來した。國民國家という新時代の到來が、詞學を一氣に

顯學の地位に押し上げたのである。この變化は、清末の梁啓超や王國維によって先鞭がつけられ、五四運動（一九一九）によって促進され、さらに胡適の『白話文學史』（一九二八）によって決定づけられた。胡適以後の文學史はこぞって、詞を宋代文學の代表として眞つ先に採り上げ敘述するようになる。そして、當時まだ新進氣鋭の學者であつた、夏承燾（一九〇〇—八六）、唐圭璋（一九〇二—九〇）、龍沐勛（一九〇二—六七）、胡雲翼（一九〇六—六五）等々の巨星がこの時期、陸續と重厚な成果を積み上げ、中國詞學は空前の高みに登りつめた。

當時の詞學の息吹をよく伝えるものに、『詞學季刊』という専門誌がある。龍沐勛の主編により、一九三三年四月に創刊され、三六年九月の停刊まで、計十一期が刊行された（第四期まで民智書局、第五期以降は開明書局の發行）。新時代の詞學専門誌であるから、學術論文や傳記・文獻考證等の近代的研究成果が毎號卷頭を飾っているのはもちろんであるが、この雑誌を特徴づけているのは、そういう近代性、先進性よりも、むしろそれを覆い隠すまでに濃厚な文雅の

傳統である。三十年代當時における近現代詞人の詞作や詞話および書簡、彼らの行狀・墓誌銘や序文、彼らが揮毫したり蒐集した書畫の寫眞等々が掲載され、自ずと雅趣溢れる誌面となっている。文言對白話の比率もほぼ拮抗している。しかも、この獨特点誌面構成は、『詞學季刊』の停刊をもつて途絶したわけではない。一九八一年十一月に創刊された、施蛰存・馬興榮主編の學刊『詞學』（最新號は、二〇〇六年十一月刊の第十七輯）にも大枠が受け繼がれて今日に至っており、中國詞學における一つの傳統にさえなっている。

『詞學季刊』に表象される雅趣は、より直接的には當時の詞壇の影響によるものであろうが、遡れば清朝の詞壇にまで行き着く。詞學は、元明二代の衰退期を経て清に入ると、江浙を中心に復興した。清初の雲間派、一七世紀後半の陽羨派、一七世紀後半—一八世紀初の浙西派、一八世紀後半—一九世紀前半の常州派というように、次々と新しい流派が起り、詞壇が一躍活氣づいたのである。その間、模範とされた詞人や詞風は微妙に變化したものの、もつと

も長期にわたり大きな影響力をもった浙西派が、南宋の姜夔と張炎を仰いだことによつて、姜・張が標榜した「雅詞」と、北宋末の周邦彥を頂點と見なす詞學觀が、清代後期以後における詞學的主流となつた。つまり、清朝の江南という、もつとも洗練された傳統文化の盛地にあつて、文化的「通人」たちが、己の文雅を表現するための高等手段として、「雅詞」を選択し活用した結果、詞は中國言語藝術における獨特な位相を獲得した。そして、それは二十世紀以降の近代詞學にも確實に受け繼がれている。

一方、我が國において、この文雅の傳統は、ついに根づくことはなかつた。江戸後期の田能村竹田や野村篁園、明治期の森槐南や森川竹礫のように詞學に傾倒した文人はいるにはいたが、やはりそれは例外中の例外にすぎない。したがつて、日本において近代詞學を構築するには、自ずと中國の傳統を踏まえざるを得ない。村上氏は必然的に中國のそれを參照し、その枠組みを受け入れることから全てを開始した、と忖度される。そして、その成果が見事に結實したのが、三十年前の『唐五代北宋篇』に他ならない。古

今體詩と詞の異同論を中心にすえた独自の視點に、中國近代詞學のお家藝ともいえる、考證を軸とする精緻な分析が加わつた諸論は、日本國內のみならず、中國においてもきわめて高い評價を獲得し、中譯本がすでに出版されている（楊鐵嬰譯、『唐五代北宋詞研究』、陝西人民出版社、一九八七年）。村上詞學の目指すところは、中國近代詞學という、蕩々たる大河の本流に直接連續することであり、日本詞學という、か細い支流に己の位置を定めることではなかつた。

近代詞學の大家の一人、吳世昌（一九〇八—八六）の門弟、施議對は、『方筆與圓筆——劉永濟與中國當代詞學』（『中國韻文學刊』二〇〇四年第一期）という論文の中で、二十世紀中國詞學の代表的人物六〇名を、五つの世代に分け列記している（ただし第五世代は空欄のまま）。ここに記された日本人は、第三世代の神田喜一郎と第四世代の村上氏の二人だけである。ちなみに、第三世代には夏承燾、唐圭璋をはじめ『詞學季刊』の同人や吳世昌等の名が列記され、第四世代には羅慷烈、葉嘉瑩、馬興榮、嚴迪昌、吳熊和、王水照等の名が列記されている。このように、村上詞學は二十

世紀の顯學、中國近代詞學史の上にも、すでに定位されている。

しかし、前著『唐五代北宋篇』には、清朝以來、詞壇がもつとも重視した姜夔を始めとする南宋の諸詞人の論が、當然ながら含まれてはいない。南宋詞は、村上詞學がより完全な内容に近づくために、避けては通れぬ最大の課題であった。そして今、我々の眼前にある『南宋篇』こそは、氏が三十年をかけ導き出した、この課題に對する回答なのである。

*

*

*

『南宋篇』は、以下のような五つの章と、附論三篇および附録からなる。

第一章 綜 論

第二章 辛稼軒詞論

第三章 姜白石詞論

第四章 吳夢窗詞論

第五章 周草窗詞論

書 評

附論一 楊柳枝詞考

附論二 陶枕詞考——『全宋詞』補遺

附論三 文人之最——萬紅友事略

附録四則

第一章では、まず南宋詞が、北宋詞の展開を受け、主として二つの流れをもつことが説かれる。一つは、官僚文人が現實の日常生活に根ざし、現實に即して詠じた詞、他の一つは、非官僚の專業的文人が表現の洗練と典雅幽遠の境地を追求しつつ詠じた、唯美主義的な詞である。村上氏は、さらに前者を「現實派、士大夫の詞」、後者を「典雅派、文人の詞」と概括している。これは、從來、「豪放」か「婉約」かという二項對立で色分けされることの多かった詞論の缺點を補うべく、新たに打ち出された指標である。

本書にも引用されるように（一八頁）、すでに八十年代に吳世昌が、蘇軾を「豪放派」と見なすことに疑義を呈している。すなわち、「豪放派」の開祖とされる蘇軾であれ、「豪放」詞と見なしうる作例はきわめて少なく、繊細かつ纏綿たる抒情詞が強半を占めること、しかも彼の周囲にも

「豪放」詞をもつばら多作した詞人がいないこと等を指摘し、それを根據に、「豪放派」なる流派はそもそも實在しなかった、と主張した。

村上氏は、吳氏の説に賛同し、蘇軾と辛棄疾は「豪放派」詞人ではないことを追認するが、同時に兩者の詞に否定したい類縁性のあることを認め、それを説明する新たな枠組みとして、「現實派」という概括を行っている。

これは、詞の風格によるものではなく、詞人の表現志向を基軸とする類別である。「現實派」詞人とは、日常の生活の中で見聞したり體驗したりした事柄を、比較的ストレートに表現した詞人を指す。たとえ同一の時代に生きたとしても、社會的地位の如何によつて、見えてくる世界や感じ方は一様ではない。したがつて、「現實派」に類別される詞人の作品は、風格も内容も多種多様となるが、直敘のスタイルを主とし、作者と作品の關係が直線的に結ばれる、という點で大きな共通點をもつ。

とはいへ、いっただいに新しい基準による分類は、從來にない新しい組み合わせを生む。たとえば、これまでは「婉

約派」詞人と見なされ、反^{アンチ}蘇軾として語られることの多かった李清照が、この分類によつて、蘇軾と同じ「現實派」に組み入れられた。この點は、舊來の詞學觀に慣れ親しんだ者にとつては、大きな驚きとなるかもしれないが、私はこれこそが、獨自の南宋詞論を展開するために、村上氏が熟慮の末に導き出した、窮極の分類基準なのではないか、と考える。とりわけ、「典雅派」の獨特な位相を際立たせるために、必要不可欠な分類であつたに相違ない。

その「典雅派」は、本書では次のような輪郭をもつ一群であると性格づけられている。まず、正式な官職に就かなかったが、世俗に背を向ける隱者とは異なり、權貴と積極的に交わり、權貴に寄食した文人たちである。非官僚であつたがゆえに、多くが經歷未詳であるが、一介の庶民ではなく、名家の出身者が多い（社會的身分）。その表現傾向としては、「現實派」がしばしば詠じた愛國憂國の情をほとんどまったく描かない、という點にまず大きな特徴がある。そういう、ますらおぶりは、あたかも填詞に相應しくない、というかのごとくに排除される（主題の傾向①）。六

朝貴族のサロンや初唐の宮廷における文學に似て、彼らは「何を」より「如何に」に執着し、修辭の洗練に傾倒する。よって、修辭技巧が示されやすい詠物詞を多作し、彼らの

代表作も多くそこに含まれる（主題の傾向②）。具體的な修辭上の特徴としては、直敘よりも隱喩や象徵的手法を好む（表現の傾向①）。また、歌辭文學としての詞の本來性を強く自覺し、表現と音樂の諧和を追求した。音律に通じ、姜夔・吳文英のように自ら作曲を手がけた者もいる（表現の傾向②）。

右のような共通項をもつ「典雅派」の中にも、好對照な兩極が存在することを、村上氏は指摘する。それは、姜夔と吳文英の二人である。ともに音律に通じ、周邦彥を祖述するものの、姜夔の詞が「清空」と評され、直敘を多用する（ただし、「現實派」の直敘とは質的に異なる）のに對し、吳文英詞は「渾厚」とか「凝澁晦昧」と評され、隱喩を多用し、兩者の詞風は大いに異なる。村上氏は、この異同を、兩者が周邦彥からそれぞれ別のものを繼承し發展させたからだと説く。周詞の典雅を繼承しつつも、姜夔が修辭的

には独自の手法を開拓したのに對し、吳文英は周詞の修辭特徴をいっそう徹底させたとし、吳文英を「周邦彥の直系の後繼者」（三三頁）と位置づけている。

以上のような總括をもとに、『南宋篇』では、「現實派」詞人の代表として辛棄疾一人が、「典雅派」詞人の代表として姜夔、吳文英、周密の三者が、採り上げられ、各自專論一章が與えられている。

第二章「辛稼軒詞論」は、經歷、詞の諸相、歷代選本における評價、という三つの柱からなる。まず、辛棄疾の經歷については、中國ですでに多くの年譜や評傳が公刊されているが、村上氏の考證によって、通行の傳記研究における不足や不正確な部分が幾つか補正された。辛棄疾は、官としてきわめて特異な出自をもっている。金の支配下にある山東濟南で生まれ育ち、成人後、抗金の義勇軍に加わり、その戦功をひっさげ、二十三歳の時、南宋に歸し、官位を授けられた。その時、與えられた「右承務郎、江陰軍簽判」という最初の官職を、不當に低い處遇と記す評傳が複

數存在するが、村上氏はそれを否定する。科擧を經ていない「無出身」者に對する處遇としては、むしろ破格の厚遇であり、狀元には劣るものの、一般の科擧及第者よりもずっと優遇されていたことを、當時の實態を精査した上で證明している。その他、彼は「無出身」の官僚としては異例なほど順調に昇進したが、村上氏はその理由を、難局に際して彼がしばしば見せた、果斷な行動力と類まれなる危機管理能力に求め、その突出した治績に朝廷が應えた自然な結果であることを、具體的事例とともに示している。また、淳熙八年の落職についても、彼が對金強攻策を強く主張したため排斥された、とする通説に疑義を呈し、もっと複雑な官界の裏事情があったことを指摘する。村上氏は、當時、辛棄疾に向けられた「姦貪凶暴」という誹謗中傷を採り上げ、それが——赫々たる治績を上げ、型破りで實力のある「無出身」官僚——辛棄疾に對する、「有出身」官僚の嫉妬もしくはアレルギー反應に起因するものであることを、リアルに描き出している。

稼軒詞の諸相については、同時代士大夫との交遊詞、閑

居の詞、農村詞、晩年の詞、の四種が採り上げられ、「現實派」詞人の表現特徴が具體的作例に即して論じられている。

選本において稼軒詞をどう扱うかという問題は、たんに辛棄疾一個人の評価に關わるだけでなく、選者の詞學觀やその時代における南宋詞全體の評価へと直結する、きわめて重要な意味をもっている。稼軒詞を多く選録し、辛棄疾を高く評價すれば、その對極にある典雅派の評価は相對的に低下し、その逆もまた同様の結果をもたらす。村上氏は、十三世紀半ばから二十世紀半ばに至る七種の代表的選本を調査し、辛棄疾と吳文英の作品收録數が、過半の選本において、ちょうど反比例の關係にある現象を指摘し、それが各選者の詞學觀をストレートに反映していることを説く。なかでも、龍沐勛『唐宋名家詞選』の初刊本（一九三四）と修訂本（一九五七）における異同を指摘し、變化の背景を推論した條が、興味深い。初版本で、龍沐勛は己の師である朱孝臧の詞學觀を襲つて、吳文英をもっとも多く選んでいたが、修訂本では、辛棄疾の作品をもっとも多く選び、

吳文英の選錄數を初版の三分の一以下に抑えている。村上氏は、抗日戰爭や社會主義運動等による世相の變化が、辛棄疾の評價を釣り上げた一方で、吳文英の評價を低下させ、それが龍氏選本の改訂にも反映されている、と分析する。

——このように、辛棄疾（吳文英）の評價は、前近代の詞學觀を測る重要な尺度となるばかりか、近現代においてもなお、世相を映し出す明るい鏡として存在しつづけている。

第三章「姜白石詞論」では、第一章「綜論」で提示された、南宋詞人の二つの類型が再提示された上で、姜夔が南宋最初の「典雅派」文人であることが、まず確認される。その上で、生平と著述、周邦彥および吳文英との相違、歷代選本における評價、という三つの側面から姜夔が論じられる。

姜夔は非官僚であつたがゆえに記録に乏しく、經歷の詳細はもはや分からないが、當時の名士、たとえば、蕭德藻、尤袤、范成大、陸游、楊萬里、樓鑰、葉適、朱熹、辛棄疾等々と交遊があり、その交遊關係の廣さがひとときわ我々の

目を引く。村上氏は、中でも、張鑑と張鑑という二人の人物に着目する。両者はともに宋朝再興の功臣、張俊の曾孫で、南宋きつての名望家の子弟であつた。張鑑一家の豪奢な暮らしぶりは、周密『武林舊事』等に克明に記録されており、姜夔を尊崇した張炎は、彼の曾孫に當たる。村上氏は、張鑑との親しい交遊が、彼の子孫である張炎の詞學觀に影響を及ぼした可能性を指摘する。また、張鑑からは長期にわたつて經濟的庇護を受けていたとも指摘する。布衣文人がなにゆえ權貴の庇護を受け、かくも多くの一級の文士と交流し得たかについては、なお謎が多いが、このような個別の交遊關係が明らかにされれば、その真相に迫る糸口が探し當てられるかもしれない。そういう期待を大いに抱かされる考證である。

姜夔の著述に關しては、とくに歷代詞集諸本の系統について詳細な考證が加えられている。夏承燾をはじめ中國近代詞學の大家が、すでに版本考證を行つてゐるが、村上氏はそれを檢證した上で歷代諸本の系統を圖によつて示し、その結果、版本の影響關係が一目瞭然になった。

周邦彥および吳文英との異同については、第一章で示された内容がより細かく論じられている。村上氏は、南宋中期の詞を、辛・姜・吳という三者の鼎立状態と見なし、その源流として、蘇（軾）・柳（永）・周（邦彥）を想定している。

歴代選本における評價については、周濟（二七八—一八三九）『宋四家詞選』における特異な扱いと、宋代における評價の二點が採り上げられている。清朝常州派の理論家、周濟の編『宋四家詞選』は獨創的な選本で、周邦彥、辛棄疾、王沂孫、吳文英の四家を宋詞の代表と位置づけた上で、計四六の詞人をこの四家の下に分屬させる形態をとる。問題は、姜夔を、詞風のおよそ異なる辛棄疾の下に列している點である。村上氏は、この特異な扱いに苦慮しながらも、その要因を、この選本が填詞學習の階梯、すなわち王沂孫を入門の手本とし、そこから吳文英へ進み、辛棄疾を経た後に、窮極の手本・周邦彥へと向かう、という道筋を示すためのものである、という編纂の目的に求め、その合理的な説明を試みている。さらには、常州派のライバ

ル浙西派が姜夔を第一に推したのに對抗して、故意に彼を四大家から外したのではないか、とも推論している。村上氏が本論で周濟『宋四家詞選』を採り上げたのは、おそらく第一に、この選本における姜夔評價が評價史的にきわめて特異であったこと、第二に、編者周濟の近世詞學史における影響力の大きさに鑑みて、無視することが困難であったこと、の二點によるものであるうが、事實を前にまず公正にして中立たらんとする氏の嚴格な學問姿勢を垣間見る思いがした。

宋代の選本は、編者の詞學觀の相違によって、辛棄疾と吳文英の選錄狀況がしばしば正反對になるが、姜夔の詞は概ねどの選本においても平均的に多く採られている。この事實を理由として、村上氏は、辛・姜・吳を三大家と見なす詞學觀が南宋においてすでに確立していたと指摘する。

第四章「吳夢窗詞論」では、經歷、別集諸本の系譜、交遊關係と作詞、音樂的素養、周邦彥との繼承關係、の五つの側面から論が展開される。

吳文英の經歷については、「典雅派」文人の常として不明の部分が多い。しかし、村上氏は、数少ない事實の中から、彼の出自に關して説得力ある説を導き出している。すなわち、彼に翁逢龍、翁元龍という兄弟がいた事實に着目し、にもかかわらず彼が翁姓ではなく吳姓である理由を、生母が卑賤の出であつたがゆえに、翁姓を名乗ることが許されなかつたためであらう、と推論する。彼が科擧に應じた形跡がない理由も、その出自ゆえに受験資格を得られなかつたためとし、舊説を否定する。舊説では、經義の成績が芳しくなかつたからとか、科擧に關心がなかつたから、という説明を加えている。それに對し村上氏は、そもそも南宋の科擧制度は經義と詩賦の二コースに分かれており、經義を受験しなくとも及第可能であつたこと、彼がのちのち權貴と積極的に交わり、役人アレルギーがあつたとは到底思えないこと、の二點を指摘し、舊説の成り立ちがたいことを逆に證明している。さらに、彼の出自がその作風にも大きな影を落としている可能性をも指摘する。彼の詞には我が身の懷才不遇をかこつ作品が殆どないが、それは、

制度的に官になる道を斷たれた現實を彼が甘んじて受け入れ、職業文人としての立場に徹し切つた結果であらう、と推論する。

つづいて、姜夔の場合と同様に別集諸本の系譜が整理されて圖示された後に、吳文英詞の一大特徴をなす、權貴との交遊の間に作られた作品群が論じられる。彼が交遊した權貴には、皇族の趙與芮の他、宰執の吳潛、賈似道、史宅之等がいる。彼らに獻じた作品から、あたかも幫間のごとき吳文英の立場や、彼ら「典雅派」の職業詞人が置かれた、士大夫詞人とは相異なる、填詞創作の特殊條件が抽出されている。併せて、吳文英が權貴の生日を祝賀する「壽詞」を多く残している事實にも觸れ、詞が社交の重要な具として活用されていた南宋當時の實情も紹介されている。

音樂の素養に關わる問題は、歌辭文學でもある詞の本質とも直結し、ひとり吳文英のみならず、すべての詞人を論じる際に不可避の問題でもある。とくに「典雅派」の職業文人にとって、音樂の造詣は、己の存在價值を左右する基本要件の一つであつた。音律に頓着しない士大夫の詞に對

して、專業詞人がしばしば手厳しい評價を下したのは、この點こそが平均的士大夫詞人に優越する彼らの強みだったからであり、それゆえ拘泥しないわけにはいかなかったからであろう。音楽に對する深い理解の有無が、詞人としてプロであるかアマであるかを分ける最終の基準となることを、村上氏は專業詞人の言説を引きながら我々に示している。そして、吳文英が音楽に通曉していたことは、彼の自度曲が複數存在する事實によつて、すでに明らかであり、さらに、填詞の教本『樂府指迷』の作者、沈義父がその序文において、吳文英とその兄翁逢龍から詞學を教わつたと明記している事實からも裏づけられる。吳文英は自らの詞學觀を何一つ語つてはいないが、彼がプロ中のプロの詞人であつたことを、それらの事實がすでに雄辯に物語っているのである。

周邦彥との關わりについては、これまでの各章においても、村上氏の持論が繰り返し述べられている。村上氏は、吳文英詞の中に、周邦彥の詞風のいっそう純化された形を見出している。たとえば、次のように。

もともと詞、ことに慢詞は、「誰が」、「いつ」、「どこで」、「何をした」というような敘事の基本を無視するところに根元的な特色があると思うが、この點では、周邦彥を経て吳文英に至つていっそう純粹化され、ほとんど極限に達したといつてもよいであろう。（一五四頁）

吳文英の「如詩家之有李商隱也」と評されるような華麗な措辭、「晦澁」とも評されるような隱微な表現は、むしろ周邦彥を超えるものがあるが、それは決して清真詞と方向を異にするものではなく、清真詞に本來的に内在する指向性をそのままに發展させたといえるように思う。（二五五頁）

村上氏は、このように周邦彥と吳文英の緊密な繼承關係を指摘する一方で、それが吳文英の作家としての純粹な個性に全て由來していたわけでもないことを併せて主張している。なぜなら、權貴に奉仕する職業詞人の性として、彼も權貴の嗜好を第一に考え、それに沿うように詞を製作したはずだからである。したがって、彼が周邦彥に近似した

詞を書いたのは、結局のところ、權貴がそれを欲したからだ、という論理に歸着する。南宋中後期の貴人たちは、北宋徽宗朝の洗練された貴族的文化を愛好し敬慕した。周邦彥は徽宗朝の大晟府にあつて、その爛熟した文化の一翼を確かに擔った詞人であるから、その詞は彼らの好尚にもっとも合致していた。

吳文英は、今日の中國においてもホットな研究対象の一つであるが、修辭表現の特徴分析や風格の議論を主體とする作品論的アプローチが壓倒的に多い。村上氏の論のように、吳文英の詞の位相を、職業詞人としての彼の立場と當時の貴人階層を中心とする文人趣味に關係づけ論じた研究を、私は寡聞にして知らない。この論によって、吳文英詞を読み解くための新しい視點が、確實に付け加えられたといつてよい。

村上詞學は、中國近代詞學の傳統を襲い、考證を軸に論が展開するのを最大の特徴とする。それゆえに、辛棄疾のように傳記資料が豊富に傳わっている對象ならばともかくも、吳文英のようにそれが殆ど傳わらない詞人の場合は、

普通ならばもっとも困難な對象となるはずである。しかも、彼は經歷のみならず作品も、隱喻と象徵表現によつて埋められ、散文的ロジックや考證的世界とはおよそ縁遠い場所に位置している。しかし村上氏は、凡愚の豫想を見事に裏切り、この困難きわまりない對象と四つに組み、見事にそれを組み伏せて、從來にない独自の吳文英論を生み出している。村上氏の吳文英論は、『南宋篇』のなかの白眉ともいふべき一章であり、この一章のなかに、村上氏の南宋文人詞に關わる積年の構想と知見のすべてが凝縮されているように感じた。

「綜論」を除く三章が、中國近代詞學において至高の評價をすでに獲得している南宋の三大家を對象とするものであるのに對し、第五章で採り上げられる周密は、村上氏によれば、今日、しかるべき正當な評價を得ていない詞人である。氏は、彼の家系および經歷と詞集、早期の詞、晩年の詞という三つの柱によつて周密詞論を展開し、彼が辛・姜・吳三家に對しけつて見劣りしない詞人であることを

強調する。

まず、彼の家系が申し分のない名家であり、「二窗」と並稱される吳文英と比べ、遙かに恵まれた家庭環境であつたことが説かれる。彼は一度地方官（義烏縣令）に就いた経歴をもつが、すぐに宋朝が滅ばされたため、杭州にある妻楊氏の實家に身を寄せ、遺民として後半生を送つた。彼の主要な詞集には、周密自編の『蘋州漁笛譜』と、乾隆年間編輯本『集外詞』があるが、前者は宋朝滅亡以前の作品しか收めず、滅亡後の作品はすべて後者に收められている。王朝の崩壊という大事件が當時の文人に與えた影響は、むろん多大であり、周密の詞にもそれが如實に表れている。しかし、舊來の周密評價は殆どすべてが『蘋州漁笛譜』中の作品に基づいて行われており、彼が遺民となつて以後の作品が顧みられておらず、村上氏はこの點を不服とする。そこで、『蘋州漁笛譜』と『集外詞』の作例をそれぞれ分析することによって、彼の詞風の變化を明らかにし、それを基礎として新たな周密詞論を構築している。

『蘋州漁笛譜』に收められる早期の詞には、文人仲間

の會合や貴人の華やかな宴會、園遊において詠じられた作が少なくない。村上氏は、そういう機會に作られた作例を一篇（瑞鶴仙・寄閒結吟臺……）採り上げ、類似の背景のもと作られた吳文英の作例（高陽臺・豐樂樓……）との比較を試みている。村上氏は、表現の洗練という點で周密の作が非凡であることを認めつつも、吳文英の作に認められる複雑な陰影や深みに乏しいことを理由に、吳文英の方に軍配を上げている。

一方、『集外詞』所收の晩年の作において、この種の題材は影を潜める。この一事をもつてしても、宋朝滅亡後、彼の詞作環境が大きく變化したことを知ることができる。そして、現實に彼の詞も大きく變質し、晩年にいたつて精彩を放ち始める、という。とくに、宋朝滅亡前夜、南宋帝後の陵墓が暴かれるという事件が起き、この事件に對する思いを十四名の文人が題詠の詞に寄託して詠じた作品群があるが、周密の三首は、王沂孫の詞と甲乙つけがたいほどの傑作である、と村上氏は絶賛する。また、梅を詠じた早期と晩年の作例を一つずつ擧げて比較し、早期の作が表現

技巧を誇示するかのような詞風であるのに對し、晩年の作例には深い感慨が込められ、抒情詩としてきわめて高い境地に達している、とする。そして最後に村上氏は、周密を吳文英より一段低く見積もった周濟（『宋四家詞選』）の見識を疑う一方、周密を史達祖、姜夔、吳文英、王沂孫、張炎と並んで評價した、——周濟と同時代人で、吳中詞派に屬する——戈載（一七八六—一八五六／『宋七家詞選』）の慧眼を高く評價している。

以上、南宋詞に關わる五章の他にも、中唐の頃に盛んに作られ始める「楊柳枝」の源流と展開を、音樂との關わりで論じた力作「楊柳枝詞考」や、民間における詞の流行を具體的に傳える陶枕の詞についての論考、『詞律』の編者として知られる清初の文人、萬樹について詳論した「文人之最」の三篇が附論として掲載されている。いずれもこれまで、取り上げられることのなかった新しいテーマであり、きわめて高い價值が含まれるが、紙幅の都合により、本稿での細かな紹介は割愛する。

書評

* * *

『南宋篇』で用いられた方法は、『唐五代北宋篇』のそれと基本的には變わらない。すなわち、村上詞學の基本型は、考證を軸とする實證的な作者論である。にもかかわらず、兩著を読み終えて似通った讀後感を抱く讀者は、おそらく少ないであろう。『唐五代北宋篇』の明快さが、『南宋篇』ではいささか後退し、その分、より複雑で難解な印象を受けるのではなからうか。その要因はむしろ村上氏の側にあるわけではなく、對象とする詞人および詞の質的相違に起因している。

『唐五代北宋篇』で論じられた詞人は殆どが士大夫であり、その詞も、『南宋篇』の分類に従えば、大半が「現實派」の作品である。よって、傳記資料が比較的多く残っている上、作品も總じてシンプルで分かりやすい。一方、『南宋篇』で採り上げられた詞人は、辛棄疾を除くと、すべてが非官僚の職業文人であった。彼らは傳記資料に乏しく、作品の各表現は總じて暗示的で難解である。したがっ

て、彼らはもともと、作家論的にも作品論的にも、考證を阻む大きな困難を内包していた。それが結果的に、『南宋篇』を、より難解に感じさせる大きな要因になっていよう。

ところで、『現實派』の南宋詞人は、辛棄疾以外にも、李綱、張元幹、陳亮、劉過、劉克莊等々多數おり、數の上では「典雅派」詞人にけっして引けをとらない。よつて、彼らがより多く採り上げられ論じられていれば、『南宋篇』の讀後感も大分變化したに違ひない。しかし、村上氏が最終的にそういう構成を採らず、三對一の比率で「典雅派」詞人をより多く採り上げたのは、おそらく近世近代に至るまでの中國詞學史を視野に納めた上での決斷であつたであらう。近世近代の詞學觀は、擇一的に言えば、「典雅派」を中心に構築された。そして、私見によれば、村上詞學の目指すところは、現在なお命脈を保つ、中國詞學の傳統に連續することにある。よつて、『南宋篇』において、「典雅派」詞人が論究の中心に置かれたのは、必然の結果であつた。

幾らか難解さが増したとはいえ、『南宋篇』に數多くの

新しい見解が含まれることは、本稿においてすでに具體的に紹介したとおりである。これら新しい知見の數々は、『唐五代北宋篇』と同様に、再び中國の本流に大きな波紋を投げかけることになるであらう。その反響を、私も固唾を吞んで見守っている。

(二〇〇六年十二月 創文社)